コーディネータの視点

21世紀の美術教育構想と絵画のモダニズム―美術教育が歴史性を獲得するために

永守基樹
NGAMORI, Motoki
和歌山大学 教授

1．はじめに―経緯と趣旨

「美術教育学の実践性」あるいは「実践的な美術教育研究」については本学会で論議されてきたが、それは畢竟、学と実践との関係性が生まれる「それぞれの現場」に形成されるものであろう。このような現場の延長として、あるいはその現場のひとつとして、この地区会はある。

今回の地区会の企画は、和歌山大学と地域の美術教育者との連携研究の場である「和歌山大学美術教育研究会」での題材群開発・実践が契機になっている。研究会誌『美術教育実践研究』（創刊号，2012）で示した内容を検証するための小さなシンポジウム（「［絵画・以降］の時代に構想する絵画教育」本誌に記録を掲載）で建設的な論議が出来たことを原型として、それを発展させたものが本地区会でもある。

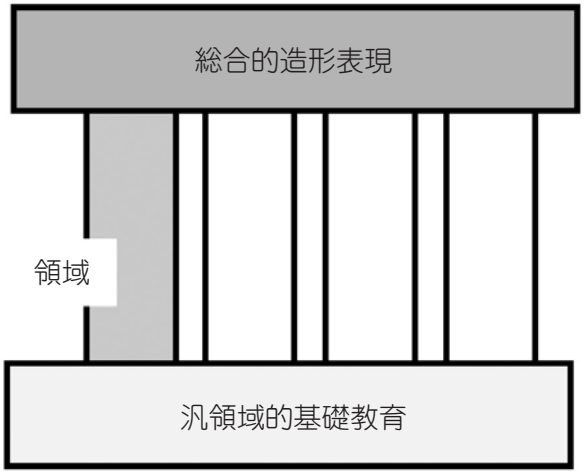
今回ご登壇の方々に企画を提案したところ、幸いにもご快諾を得た。招待発表者とコメンテイターは、それぞれの分野で質の高い研究を展開し、美術と教育の交差する場で「絵画」を語り合うための最上の顔ぶれであることを疑わない。

結果的に招待発表・提案者の三方は、いずれも教員養成で絵画を担当するアーティストであり、それぞれの世代を代表する研究者でもある。「美術教育学」における［実践と理論］、［美術と教育］、［教科内容と教科教育］などの構図が、この論議の場で浮かび上がることだろう。美術教育系三学会の連携の可能性も視野に入れながら、多様な視点を提供して頂けるコメンテイターの四方とともに、これからの美術教育を構想する場になることを願っての企画である。

2．脱・芸術のなかで美術教育を考える

美術教育学は、地域と実践の「いま」に密着すべきものである。しかし他方では、未来への投企として、子どもや社会、そして美術・アートの更新を働きかける責任を持つものだ。だが、この作業は現代において非常に困難なものになっている。特に絵画の凋落がもたらす影響は大きく、美術教育はその構想の支柱を失っているようにも見える。

その要因の最大のものは、「美術」なるものがデュシャン以降、ダダとキッチュによって解体され続けていることであり、フォーマリズム的美術（絵画）史が無効になったことであるが、それは今に始まったことでもない。この解体についての詳しい論議は別稿に譲り、ここでは、1990年代において芸術・美術・アートなどの概念や枠組みについて大きな変革が顕在化したことを指摘しておきたい。生活や政治、情報交換や対話活動などと「芸術」のボーダー領域で、その芸術としての形式的変革と解体が進んだことの意味は大きい。その解体は20世紀初頭のダダでも、1970年前後のネオダダや反芸術運動でもなく、そして1980年代のポストモダン的混淆でもない、より根本的なものだ。「次の千年紀に向けての芸術



図：基礎・領域・総合―バウハウス教育課程略図

の形式（New Art form for next millennium）」を主張し、身体に潜む記憶に働きかけようとした荒川修作や、アートの形式的冒険を担ったメディアアートが開いた地平は、21世紀の芸術が、その姿を大きく変えることを示唆している。そして、このような芸術や美術の枠組みの溶解や解体の状況に対応する美術教育の構想が求められつつある。

3．歴史性の回復―鑑賞教育とワークショップから

現在の美術教育を見てみよう。この20年ほどの美術教育界の大きな焦点は二つあり、それは「鑑賞教育」と「ワークショップ」であったと私は考えている。二者とも「近代・以降」の美術教育のトレンドとして必然的なものであり、重要な内容と方法を示している。

またその背景となっている、社会的構成主義などに由来するリベラルな教育学的主張は、元来、美術教育の思想や方法と親和性の高いものであり、大きな示唆を美術教育に与え得るものだ。だが、社会的構成主義そのものは（いうまでもなく）基本的には美術教育の内容論を示すことは出来ないのであるし、鑑賞もワークショップも、教育の方法であって内容ではないのである。

私たちは、再度、これからのアートの変容、それがもたらす社会と芸術との関係性や、その学びの変容について、美術・芸術・アートの論理の側から探り、その教育のビジョンを構想する必要があるだろう。美術史の思考に貫徹されない鑑賞教育、コミュニケーション論に拡散するワークショップ。それらから透けて見えるのは、「歴史性」の欠如ではないだろうか。もちろん、それらの教育の背景になっている理論には歴史的な認識もあれば、社会変革の戦略もある。脆弱なのは、美術なるものとの関係性のなかで、教育と学びに歴史性を与えていくという美術教育者の意識ではないだろうか。私たちが必要としている美術教育の展望―中長期的ビジョン―は、美術と教育に関する歴史の自覚と回復に基づくものである。

これからの枠組みの見えないアートの世界への美術教育構想は困難であるが、この芸術の様々な脱領域的で総合的な展開は、その方向性の起源を過去の様々な芸術に見ることが可能である。そしてその姿から美術教育のビジョンへの示唆を得ることも可能であろう。

例えば、古代からの総合芸術である「建築」「舞台」「書物」を先ず念頭に置きながら、「茶の湯」や「ゴシック」などの概念を持ち出し、目を近代に転じて、アール・ヌーヴォーでの「小芸術の連合」やバウハウスでの様々な「総合芸術」、反芸術的気分のなかでの「環境」や「都市」、映像メディアに先導された「マルチ・メディア」などを私たちは思い浮かべることができる。

このような「総合的」な芸術の歴史を回顧する時に、近代において「絵画」が先導した美術史は、いわば特殊なかたちだったという印象さえ受けるだろう。私たちが直面している「絵画教育」は、このような文脈と背景のもとに置かれた課題なのである。

4．絵画のモダニズム／レトロスペクティブ

いうまでもなく、この課題のひとつの中心軸は「絵画のモダニズム」という問題である。19世紀後半以降のモダニズムの成立に大きな影響を与え、様々な近代絵画の冒険譚によって流布された絵画史の言説は、新しさや純粋性を求めての進化論的で革命論的な歴史観、オリジナリティや個性的創造の神話化などを生み出した。とりわけC・グリーンバーグらの言説によって、絵画が純粋な視覚性と平面性へ向けて変革されるべきであるとする歴史観は、近代の終わりに生きる私たちが「美術」を歴史的（すなわち教育的）に考えるときの最も力強い軸であった。この軸を今日の美術教育の言説は如何に語り、美術教育の体系に如何に位置づけるか、が問われるべきだろう。

20世紀初頭の知の地殻変動の中で、絵画は「抽象絵画」という平面を得る。この純粋性と根源性を志向する精神に満ちた平面は、フォーマリズム的には抽象表現主義の絵画平面へと進化するべきものである。だが、この平面は色やかたちを造形要素に還元し、そこから構文のように構成する教育的ビジョンを生み出した。また、その造形要素は諸工芸の制作の基礎原理にもなり、建築として私たちの環境を構成し、さらには宇宙的真理にも通底するコスモロジーを示したのである。このような理論が生まれたのがバウハウスという教育の場であったことは、私たちにとって意義深いものだが、同時に、その予備課程を担当した教師の多くが画家であったことは、本地区会の主題にとって、さらに重要な視点を提供するだろう。イッテン、カンディンスキー、クレー、ドゥースブルク、モンドリアンらの言説は、実は絵画の外への志向が強い。近代の終わりの時代を生きる私たちが、一世紀を隔てた彼らの言葉をレトロスペクティブに再読することは、美術教育にとって必要なことではないだろうか。

5．絵画への問い

バウハウスの教育課程は簡単に図示すると前頁のようになる。基礎と柱（＝領域）と屋根（＝総合）の三者は、現在でもカリキュラムを構想する時に一定の枠組みとして機能するだろう。基礎なるものは、いつもその体系の頂点から還元化されて見出される地平なのである。総合的なるものの姿の変容は、基礎にいかなるものをもたらすのであろうか。絵画は、この三者の教育においてどのように機能するのであろうか。このような問いを通じて、一世紀ほど以前の抽象画家達の思考を回顧し、その絵画と平面の歴史を考えることは、21世紀の絵画とアートを教育に開く基礎作業であり、本地区会での論議の基軸になるものと考えている。